

立派に天下を治め、国家を保つことができる者は、「文武」を別々のものと捉えては  
いない。これらは名称こそ異なるが、その大もとは軌を一にするのである。例えば、  
水と波のようなものである。平静のときは文をもって、動乱のときは武をもって治め  
るのである。動いている状態を波と言ひ、平らかな状態を水と言うようなものである。  
水は幾度でも変化に順ってその流れを制御し、波も又氣象に応じてその勢いは自然の  
ままである。従つて、天下安泰といえども、兵（いくさ）を忘れる時にはいつでも世  
は乱れ、国といえども、戦いを好む時はいつでも身を滅ぼすと言つて過言ではない。  
いかなる場合でも、楯や鉾（ほこ）のような武器は凶器となりうるものだが、その武  
器によつて、相手の武器の使用を止めさせ、或いは思いとどまらせるということそ  
が「武」の真に意味するところである。君子（理想的な人格者）は、私的な闘争は行  
わないものでありながら、その一方で正義を争ひ、善悪を闘わせることは、哲主（物  
事の道理に明るいリーダー）や名士（経験が豊かで識見が高い人物）の為せるわざな  
のである。人を斬り殺すことは世間では忌み憚られるにもかかわらず、道に背いた者  
はこれを斬り、道を行きてその心に徳のある者はこれを賞し、一人を殺して千万人を  
助（扶）ける、これこそが「兵」の大いなる徳行についての正しい見識の持主なので  
ある。このような場合における武器は、凶器ではない。従つて、兵は殺すことによつ  
て博愛をなすのである。そう考えれば、何ゆえに「兵」とは縁起が悪く、誰からも望  
まれないものだ、等と言えようか。そうであればこそ、古き昔の法においても「人を  
制するに道を以てし、心を降し志を服せしむ。矩（かねじやく）を設けて衰ふるに備  
ふ。甲兵の備有りとし雖（いえ）ども、戦鬪の患無し」と言っている。本当に道の道た  
る事を知れば、質素にして控えめに己を勤め、人々が平和な日々をもたらす武の恩に  
報いようとの心があれば、止戈の意味するものは自ら顕著となり、そうして国家はい  
よいよ安全なものとなる。

しかしながら、近年は、上級者に仁徳の行いが絶えて、己の全力を傾けてことにあ

たるリーダーも無く、下級者も忠義の気持ちが衰えて、上下逆乱の世に苦しむことが続いている。このような時代に至って人は皆、野良犬や狼のような残酷な心となり、朝には味方であったものも、暮れには敵となり、恩を棄てて利益をとる。これをささずけて言えば、「庸妄人（特別すぐれた所も無く、でたらめな人間）は畜類に異ならず」という。世は世たらずといえども、吾れ人たらんことを嗜むべきである。みだりに他人に盲従してはならない。ただ時々刻々に心を鍛錬して家業に励むようにして、決して武士としての名を潰してはならない。このように心得て、悪を戒め、善を勧め、功績のあったものを賞揚し、悪事をはたらく徒を罰して治め、国家の守りをなすものを武士というのである。武士たる道を真実に心懸け、何事も怠らない兵は、神明も威を加え、死に到るとも不義の名により辱（はずかし）めを受けることはない。屍を竜門原上の土に埋むと雖も、名は留まりて後代の誉れを得ることこそ、最もこいねがうべきものである。もしも私（楠木正成）の子孫が不義の人となって、私の遺誠を守らなければ、この正成は速やかに悪鬼と化して、国中どこにいても見つけ出して殺戮してしまうだろう。そうならないように前述のことをしっかりと覚えておくこと。